

『父のはなまる』



愛媛県総務部総務管理課
課長補佐 大西 信治

川渕研究員から卒業レポートの依頼があった時、正直やばいと思った。何故なら卒業以来一度もセンターの行事に参加していないからだ。また、「センターで学んだことを活かして、地域で活動しています」と胸を張って言えることもない。しかし、川渕研究員からの依頼を断るわけにもいかず、ここは開き直って、誌面を借りて不義理の言いわけをすることに。

「お父さんを救急車で運んでいますので、〇△病院まで来てください」と東温消防の救急隊から私の携帯に電話が入ったのが、五月九日の午後七時。病院に搬送された父は意識朦朧の状態。救急隊の方の話とその後の目撃証言を組み合わせると、この日の



老人クラブの研修旅行(大分)

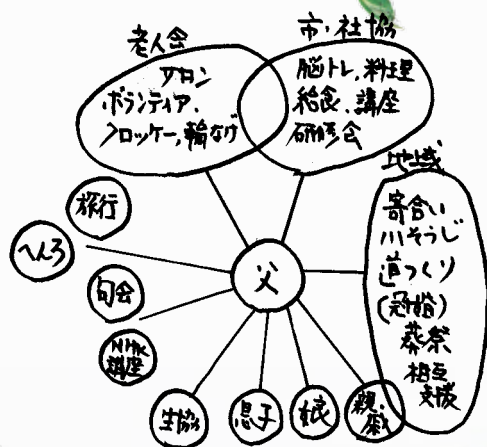
午後、父(八八歳、東温市で一人暮らし)は、市社協の「脳トレ(ーニング)講座」に自転車で参加。終了後、受講仲間のガールフレンドと飲食店で夕食をとりながら談笑した後、再び自転車で帰宅途中、市役所東の交差点を横断しようとしたところ、縁石にタイヤにとられて転倒して頭を強打。目の前で自転車の老人が突然倒れ、動かないのにびっくりした自動車の女性ほか複数の方の通報で、救急搬送となった。病院到着後しばらくして父は意識を回復、脳のCTも異常なしで帰宅したものの、七月十一日、足元がふらつき、呂律が回らなくなり、再び救急車で〇△病院へ。事故当初からある程度想定されていたが、脳に血液がたまる「硬膜下血腫」の診断で即日手術。約一か月の入院後、八月にリハビリ専門病院へ転院。運動能力はほぼ回復したが、けがの後遺症か、けがが誘発したのか不明であるが、父の認知度は低下。日常生活は見守りと部分的な介護が必要となった。この父の「介護と看護が大変だ」というのが私の言いわけである。

この間、父の頭から抜かれた牛乳瓶二本分の血液を見て貧血を起こしそうになったことや、一ヶ月間毎夜病室の硬いソファで



老人クラブ手帳(昨年1月の予定表)

付き添ったにも関わらず、「宗教団体の勧誘は出ていけ」と突然怒鳴られショックを受けたことや、中年女性というイメージの介護職員に若い男性がたくさんいるのにおどろいたことや、いろいろな老人施設があるが、なかなかマツチする施設がないという現状を目の当たりにしたことなど、初めての「経験」「出来事」がたくさんあるのだけ、私が一番「へえー」と思ったのは、入院するまでの父の生活だ。地区の老人会長をやっている「忙しい、休みがない」が口癖だったが、愛用の老人クラブ手帳には予定



父のネットワーク

がびつしり。これは確かに忙しい。
 ちなみに、事故直前の四月最終週の行事は、四月二一日・お四国、二二日・脳トレ、二三日・合同ウォーク、二四日・給食、ふれあい会、二五日・市老連總會準備、NHK講座、二六日・市老連總會、表川句会、二七日・G小倉、輪投げ、二八日・水路掃除、二九日・道つくり、三〇日・警報納会。意味不明の行事もあるが、父のネットワークを图示するとこんな感じ。地理的な範囲は狭いけれどもかなり多彩である。
 この中では、息子とのつながりが一番希薄である。「田舎で一人暮らし」と一応は心配していたが、これなら一人の方が充実していて気楽だ。もちろん三食を自分で作り、一日四キロの散歩。風呂は週四回、五キロ離れたさくらの湯に自転車。残念ながら、今回のけがとその後遺症で、このネット



料理教室

ワークは弱くならざるを得ない。かわりに一番細かった息子との線がいやでも太くなる。認知症を持った高齢者の介護は家族だけでは難しい。社会的な支援もたくさんあり、それらをうまく活用することが必要だ。ただ、そういった支援をいかにうまく組み合わせ、地域とのかかわりの中での生活を実現できるかどうかは、やはり家族の力量によるところが大きいとも感じる。
 ＊＊＊＊＊



清掃ボランティア

思っていたが、十一月九日の朝、病院のベッドで新聞を眺めていた父が、「これ見てみて、じいちゃんの俳句が出てる」。まさかとは思ったが、俳句の投稿欄には間違いなく父の名が。リハビリを兼ねて俳句を作ってみると言っていた姉が無理やり(?)作らせて投稿したもの。姉によると、選者は父の参加する句会の先生で、父の入院を知って、手を入れて載せてくれたのだとは。という裏話があるが、認知症の老人の句にしては「はなまる」か。何より「地域」と「つながり」がキーワードの『舞たうん』の結びにはびつたりなので、父には無断で掲載させてもらう。

間引き菜の大き一把をもらひけり